ネヘミヤ記９章１６−２１節
ヨハネによる福音書１４章２５−２７節
使徒言行録２章３６節

2020 年 5 月 31 日ペンテコステ礼拝説教

「教会はどこに」

今朝も礼拝全体を録画してインターネットに配信しています。

動画を見ている方々の画面には、私しか見えていない。

反対側はどうなっているのか？と思われるかもしれません。

ここしばらく、近所にお住まいの長老と牧師の家族の５名前後の礼拝です。礼拝堂はがらがらで、正直、さびしい思いがします。

しかし、今日は長老のみなさんにも礼拝に集まっていただきました。

礼拝の後に会議を開き、今後の教会の歩みを話し合うため

ある方は「信仰生活 70 年だがこれほど教会に来なかったのは初めてだ」

久しぶりに教会に来られた方はどのように感じておられるのでしょうか。

いつの日か、再び、みなさんと、この礼拝堂で、または、それぞれ置かれている場所で、顔と顔を合わせてお会いする日が来ることを待ち望んでいます。

先日、会堂の前を掃除していると、
犬を連れて前を通りかかった人から声をかけられました。
お互いマスクを付けていましたが、見ると教会学校の保護者のお父様でした。私にこう言われました。
「ネットの礼拝を見ていますよ。やっぱり一緒にお祈りできるのはあ

りがたいです。」
この状況下で、一緒に祈っている人がここにもいたのだと思い、
私も嬉しくなりました。
おそらくこの方は、礼拝の動画を見て、

家で、自分一人で祈っているのではないこと、
一緒に教会が祈っていることを知って、喜ばれたのでしょう。

もっと言えば、動画の背後に、教会の存在を感じたのではないか。

教会はこの建物の中だけに存在しているのではない。目に見えない広がりをもっているのです。

今日は、ペンテコステ。聖霊降臨日とも言われます。世界中の教会にとっての記念日です。この日世界で最初の教会が誕生しました。

ここから教会の歴史が始まりました。ペンテコステは過去の出来事ではありません。今も聖霊なる神様が働いて、教会を生かしてくださっています。

このような状況にあって、

「教会とは何か」ということが神様から問われているように思います。

もしも、教会が建物のことであるならば、今もここにあると言えます。

この建物が建築された 1963 年以来、ここにある、と言えます。

しかし１１０年を超える歴史の中で、教会の建物が失われた時がありました。5 月の空襲で建物が焼け落ちました。教会で保管されていた古い記録も焼失。当時の牧師がつけていた日誌によると、最初の日曜日は牧師が一人で焼け跡で礼拝をした。次の日曜日は牧師と数人　その中に先日召された古幡さんは１６歳でした。

この日も、今朝のように、礼拝に来られなかった人々は、

置かれている場所で礼拝をしたのでしょう。

十字架のついた建物は失われたが、そこにはなお、教会があった。

主イエスの十字架と復活によって生かされ続ける人々がいるからです。

この時とは、今とは状況は異なります。しかし、ある意味で、今よりもはるかに厳しい状況といえます。空襲によって、あたり一帯が地獄のような焼け野原となったことを聞きました。絶望的な光景が広がる中で、焼け跡の教会に向かわせ、礼拝させたのは何だったのか？

その答えが今朝のみ言葉にあります。

お読みしたヨハネ福音書の言葉は、ペンテコステに先立つ主イエスの言葉です。この後、十字架につけられるという時に、弟子たちを集めて言われました。

「心を騒がせるな」「怯えるな」

そして、

「わたしは、平和をあなた方に与える」と主イエスは言われました。

この平和とは、「世が与えるような平和ではない」とも言われました。この世が与える「平和」とはどういうものでしょうか。

国と国の間の平和　職場、学校での人間関係、家族の関係・・

このような平和は尊いものです。一方で、主イエスが与えてくださる平和は、私どもが考えている平和と、もちろん無関係ではないが、もっと強く、確かなものです。

ヨハネ福音書に記されている、この後の話ですが、弟子たちは主イエスが殺されたあと、家中の扉に鍵をかけて閉じこもっていました。

「心を騒がせ」「怯えていました」いつ殺されるかわからない。まさに、平和を失っていました。

しかも、自分たちはみなイエス様がつかまると、見捨てて逃げ去ったのです。もう弟子でも、キリスト者でもなんでもないのです。すると、そこに復活した主イエスが現れて「あなたがたに平和があるように」と言い、「手と脇腹をお見せになった」「主イエスがくださる平和」は主イエスの肉体に深く刻み込まれた、傷跡と結びついているのです。

口先だけで平和を告げられたのではありません。ところが、ここに一人だけいなかった弟子でトマスという男がいました。彼は断言します。

「私は主イエスが復活したなど、絶対信じない。手の釘後と、脇腹の槍の傷を見て、確認しない限りは」

　このトマスにも主イエスは現れて、言われます。

「あなたがたに平和があるように」そして「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばし、私の脇腹にいれなさい。」

主イエスの肉体の傷を見て彼は平和の意味がわかっただと思います。

「主イエスはこの私のために、神を信じることができず、

　暗い疑いの部屋の中に閉じこもっていた私のような者たちのために、

　また、あのペトロのように主イエスを三度知らないと言ってのけ、

　主イエスと自分との関係を絶ってしまう者たちのために、

　十字架で苦しんでくださった。

　すべては私どもに「平和」を与えるためだ。」

トマスは主イエスに言います。「わたしの主、わたしの神よ」

この告白の言葉が、ペンテコステの日にもなされました。

口にしたのは、先ほどお読みした弟子の一人ペトロの言葉です。

イエスが、わたしの主であることがわかったのです。

「主」であるということは「主人」であるということです。

この主人は、いつも私どもに目を注ぎ、守り導いてくださる。

イエス様がどういう仕方で主人となってくださったか、ペトロは告げます。

「あなたがたが十字架につけて殺したイエス」「あなたがた」の中にはペトロ自身もイエスが十字架についたのは、誰のためだったか。

ネヘミヤ記では、民が奴隷状態であったエジプトから導き出されたのに、「エジプトの時の方が良かった」と言ったとあります。

美味しい食事をはじめとする欲望を満たすことができたからです。それができなくなると、牛の像を作り、これがエジプトから私たちを救った神だと言った。人は、自分の手で、自分の神を作り出し、その結果、自分でこしらえた神に支配されてしまう。

自分が自分の主人になろうとして、なにかに支配されてしまう。自分を失ってしまう。そういう失われた者たちのために、イエス様は十字架についてくださった。

その意味でイエスを十字架につけたのは、ユダヤ人でも、ローマの兵隊でもない。この私だ、そしてあなたがただ、とペトロは告白しているのです。十字架は、私どものための十字架であった。十字架で死なれたイエス様は、死に勝利された。そして、私どもの主となってくださった。

聖霊降臨日にペトロはイエス様が私どもの主であることがわかった。あの主イエスの約束が実現したのです。

「父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、

　あなたがたにすべてのことを教え、

　私が話したことをことごとく、思い起こさせてくださる。」

「私はいなくなるが私の代わりになる方が、あなたを助けてくださる。」

「私は父にお願いして、別の助け主を遣わして、

　永遠にあなた方と一緒にいるようにしてくださる」

聖霊の助けをいただくと、聖書がわかるようになります。「ああ、これが、聖書に書かれていることだったのか」「あの聖書の言葉は、そうか、こういう意味だったのか」という時があるでしょう。イエス様が言われたこと、聖書の言葉がわかるのは、知恵があればわかるとか、人生経験が豊であればわかるということでは全くない。ただ、聖霊の導きをいただくほかはない。

聖霊は、イエスがわたしの主であることを悟らせてくださる神様です。ある人は言いました。「特別な霊の力を感じていなくても、キリストが私の救い主であることを信じているなら、もう十分に聖霊を受けているといえるのです」

聖霊なる神様が、いっそう確かに、主を信じさせてくださる。この約束の実現の開始がペンテコステです。ペンテコステ、聖霊降臨は主イエスの約束の実現の始まりです。この日の世界最初の教会が誕生し、各地に教会が生まれました。私どもの教会がいまも立ち続けているのは、すべては聖霊の働きです。聖霊なる神様は、今、ここに集う者たちと、集うことが叶わない者たちを主イエスのくださる平和によって、一つに結びあわせてくださっています。

　教会の焼け跡で礼拝を捧げた人々は、主の平和、主の平安を知っていました。それは、ある人の言葉でいうと「死を突き抜けたところに現れて来る平和」です。主イエスがこれらの人々に告げられたように、今朝、私どもにも言われます。「心を騒がせるな」「怯えるな」

主イエスは「あなたがたに平和があるように」と言われました。

主イエスから平和を与えられた人は、

人々に平和を告げる人になるのです。

終わり